

朝鮮三国における八角形建物とその性格

田中俊明

1. はじめに

鞠智城跡では、1991年度の第13次調査において、長者原地区東端から八角形建物が2ヵ所4棟検出された（熊本県教育委員会2012：pp.65-69、p.432）。日本における古代山城においては、極めて特異な遺構といえ、その後の調査においては確認されず、他の古代山城においても現在のところ、検出例がない。その用途・性格については当初から議論があったようで、楼観、佛教施設の円堂・円塔、鼓樓、天壇・地壇などが候補としてあったが（大田1993）、「南側の八角形建物跡については、「心柱の存在及び側柱が三重に巡るなどの特徴から、現在は、三層造りの「鼓樓」として復元されている」ようである（熊本県教育委員会2012：p.498）。

八角形建物は、朝鮮三国においても建てられていた。すでに報告書においても、韓国の古代山城の例や、中国の山城に例などに触れられているが（熊本県教育委員会2012：pp.439-440）、近年、新羅の王都（現在の慶州）において1例を加えた。いわゆる蘿井とよばれていたところからの検出例である。

本稿では、朝鮮三国における八角形建物の例をあげ、その性格を考察し、鞠智城跡における八角形建物の性格検討に資する材料を提供してみたい。

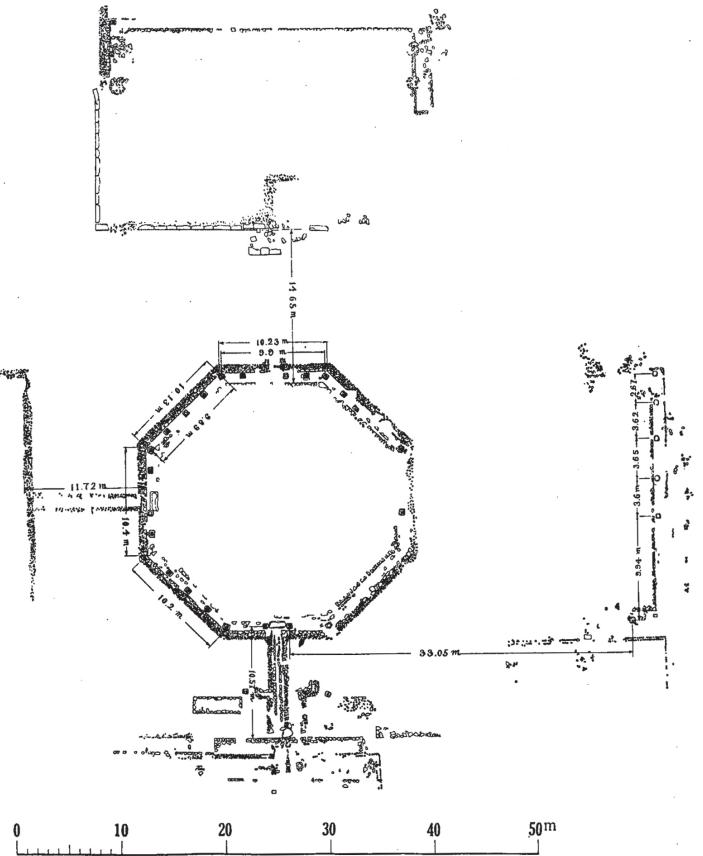
2. 高句麗の場合

(1) 高句麗寺院

高句麗における八角形建物といえば、まずは寺院における八角形の塔を思い浮かべるのが常識であろう。これまで、清岩里寺址・上五里寺址・定陵寺址・土城里寺址の発掘で確認されている。その概要を順にみておきたい⁽¹⁾。

1) 清岩里寺址

清岩里寺址は、平壤前期時代（427～586）の王城とみられる清岩里土城のなかにある（田中1995a）。平壤市街の東北部である。土城内で瓦の散布量が最も多かった表村の西南の台地は、閔野貞による指摘以来、王宮址と想像されていたが、1938年に発掘され寺址であったことがわかった。同年春、平



第1図 清岩里寺址平面図

壙博物館の小泉顕夫が現地で、排水溝が掘削されていたのをみ、断面下部に遺構が残っていることを確認し、朝鮮古蹟研究会の事業として、10月から11月にかけて発掘したものである。

台地の中心部に、八角形の建物址があった（第1図）。岩盤を基礎を利用して八角台状に削り、その周囲に割石を並べて根石とする。一辺は約9.50mある。その外まわりに各辺5～6個、方形作りだしではぞ穴をもつ小礎石を配し、さらにその外まわりに面をそろえて割石を並べ、その外側に幅70cmの玉石敷きをめぐらす。これは雨落溝とみられる。この外周で一辺約10.2mである。基壇上部は破壊され、礎石は遺存しなかった。建物正面は、南北軸が40度ほど東に振っているため南西面になるが、それを南面とよぶ。その南面と西面では、玉石敷きの中央に、階段の痕跡とそこから外にのびる幅約2mの玉石敷きの歩道がある。東面と北面にも、痕跡がわずかに残っていた。南にのびる歩道は、門址とみられる遺構に接続する。主要部はほとんど破壊されているが、雨落溝とみられる玉石敷きが残り、東西両端に廻廊とみられる建物址が接続する。ここは高句麗時代の門址の上に、高麗時代の別の建物が建てられたようである。西にのびる歩道は、11.72mへだてて西側の建物址に接続する。そこは台地の西端に近く、すでに破壊が進んでおり、建物周縁の玉石敷きが南北約21mのび、さらに北端から直角にまがって12mを残すのみであった。ただし歩道を中心として計算すれば、南北27mあったと推定できる。いっぽう東側にも建物址があり、八角建物から正面にあたる西側は破壊され、高麗時代の瓦片も多いが、東辺は、5つの礎石が南北にならび、両側に割石列が並行する。最北の礎石から東南の角まで23.48mある。このあたりには高句麗瓦片が多量に堆積していた。

八角建物址の北側には、正面32.46m、奥行き19.18mある大基壇が推定できる大きな建物址があった。東南部は民墓のため、調査できず、また基壇上部は破壊され、礎石の根固め石のみ残る。高麗瓦片が多く、高麗時代の遺構とみられるが、下層には高句麗瓦が多い。基壇西北部の下層では、基壇とやや離れて、八角建物址などと同様の河原石敷きの雨垂れ受けが南北につづき、小礎石もふたつ検出した。やはり高句麗の建物址のうえに、高麗時代に建物が建てられたようである。ただしそれ以上調査する時間はなかった。このほか台地の北端では、八角建物址の南北軸よりも東に埠敷きの建物址が確認された。礎石がひとつ残り、礎石をのぞいたあとの根固め石のみ残るところもあり、東西に長く、南面する建物址とみられるが、高麗の遺物が主で、高麗時代のものと考えられる。

翌年6月にも米田美代治を中心にして調査が行われ、埠敷き建物址の西にさらにふたつ、また北にもうひとつの建物址が検出されたが、これらも高麗時代のものと考えられる。

出土した瓦片に「寺」と刻字されたものがあり、また金銅仏光背の破片とみられるものもあることから、予想に反して寺址とされるようになった。八角建物を中心に、歩道で結ばれた三つの建物が北・東・西にあり、南に門がある配置であるが、八角建物址を塔址、北の大建物址を金堂址と推定し、一直線上に門・塔・金堂がならぶ伽藍が想定されたものの、東西の建物址については、性格がよくわからなかった。その後、1956年の奈良県の飛鳥寺の発掘をへて、この伽藍配置があらためて注目され、東西の建物も金堂で、つまり一塔三金堂式ではないかとされるようになった。飛鳥寺の東西金堂は特異な乱石積みの二重基壇で、下成基壇には小礎石を配していた。そこには軒先やひさしを支える柱が立っていたとみられるが、清岩里寺址もそのような構造をもっていたものとみられる（小泉1941;1958,李ファソン1986）。

この寺址は498年に創建されたという金剛寺にあてられている。『新增東国輿地勝覧』卷51・平壙府・古跡に金剛寺がみえ、「遺基、府の東北八里に在り」としているが、方位・距離はまさしく合致する。小泉顕夫は、現地における伝承や、遺跡前面の大同江中に金剛灘の名が残ることなどから、そのように比定した。ただし、『勝覧』にみえる金剛寺は、直接には高麗時代の寺院であり、『高麗史』にもしばしばあらわれる。たとえば肅宗7年（1102）9月辛丑には、平壙に滞在中の王が「金剛寺に幸して僧に飯し、旧塔の遺址を觀、

太子に命じて川上の祭所及び通漢橋を巡視せしむ」とある。護国の法会としての文頭婁がおこなわれた道場としてもよく知られている。清岩里寺址がその高麗の金剛寺であることはほぼ疑いなく、肅宗がみた「旧塔の遺址」が八角塔址にあたると想像することも、難しくない。この高麗時代の金剛寺が、高句麗の寺址に再興されたのは発掘の結果からみて確かであり、そのさいに高句麗時代からの伝承によって、同名でよんだという可能性がないわけではないが、もはや確認することはできない。高句麗の金剛寺に比定するためには、そのように想定したうえで、出土瓦の絶対年代が5世紀末に特定されなければならない。

田村晃一は、高句麗金剛寺比定を前提にして出土瓦を5世紀末と認め、それを絶対年代の基準にしている(田村 1983)。千田剛道は、出土瓦のうち創建瓦とみられるものは、集安の將軍塚出土の5世紀初頭の瓦と同型式であるとして、寺の創建を5世紀初頭とし、高句麗金剛寺説を否定する(千田 1983)。谷豊信は、出土瓦と將軍塚出土瓦には型式差があると批判するが、清岩里土城が平壤遷都時の王城であると認めたうえで、それを基準に、より型式的に古い將軍塚や平壤の土城里出土瓦を遷都以前としている。つまり清岩里土城内出土の瓦を、遷都後のものとして概括するのである(谷 1989;1990)。谷の場合、金剛寺にあたるかどうかの明言はないが、出土瓦が遷都直後のものであるとすれば、やはり金剛寺説には否定要素といえよう。瓦の年代をそれ自体として明確にする必要がある。

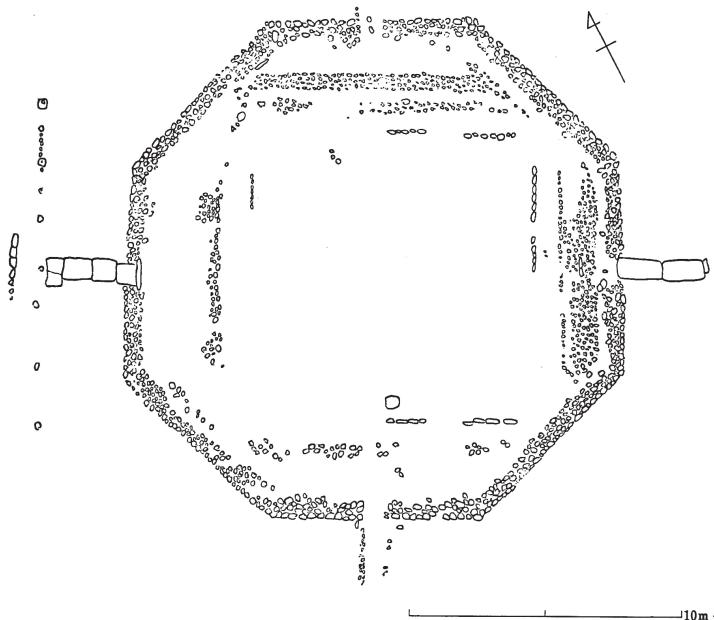
2) 上五里寺址

平壤市大城区域林興洞(旧、平安南道大同郡林原面上五里)にある。清岩里寺址の東南約2kmである。1939年に朝鮮古蹟研究会の事業の一環として、斎藤忠らが発掘し、八角建物址とその東西の方形の建物址を検出した。八角建物址(第2図)は、雨落溝とみられる玉石敷きが幅80cmで八角形にめぐり、その外縁から約3.6m内側に切石が板状にならび、方形の区画をつくっていた。この切石列と玉石敷きとのあいだは、北と東ではより小さな玉石が敷かれていた。また外まわりの玉石敷きの北面・南面では、石敷きがときれ、平石が残り、階段の痕跡とみられる。礎石等はまったく残されていなかった。玉石敷きの外縁で、一辺約8mあった。

東西の建物址は、玉石敷きの外縁からそれぞれ4m離れており、あいだには長さ70cm、幅40cmほどの板石が敷かれていた。建物基壇は長さ50cmほどの板石が外周をつくり、ともに東西約12.6m、南北約25.8mあった。その外縁には約2mあいだをおいて、方柱状の小礎石がうめられ、ほぞが出てるものとほぞ穴のあるものがあった。

東西の建物址は、清岩里寺址の場合と同様に、東西の金堂址とみられるが、北側や南側は、次年に継続調査を予定していたものの実現せず、したがって遺構の存在は確認されていない。ただし北には土地に余裕があり、北の金堂址もじゅうぶん想定できる。遺物には、高句麗の軒丸瓦が20点ほどあり、「東」字を刻印した平瓦も発見された。ほかに金銅金具・金銅垂飾具なども出土した(斎藤 1940;1971)。

なお李ファソンは、上五里寺址の八角形基壇の上には、四角形の塔が

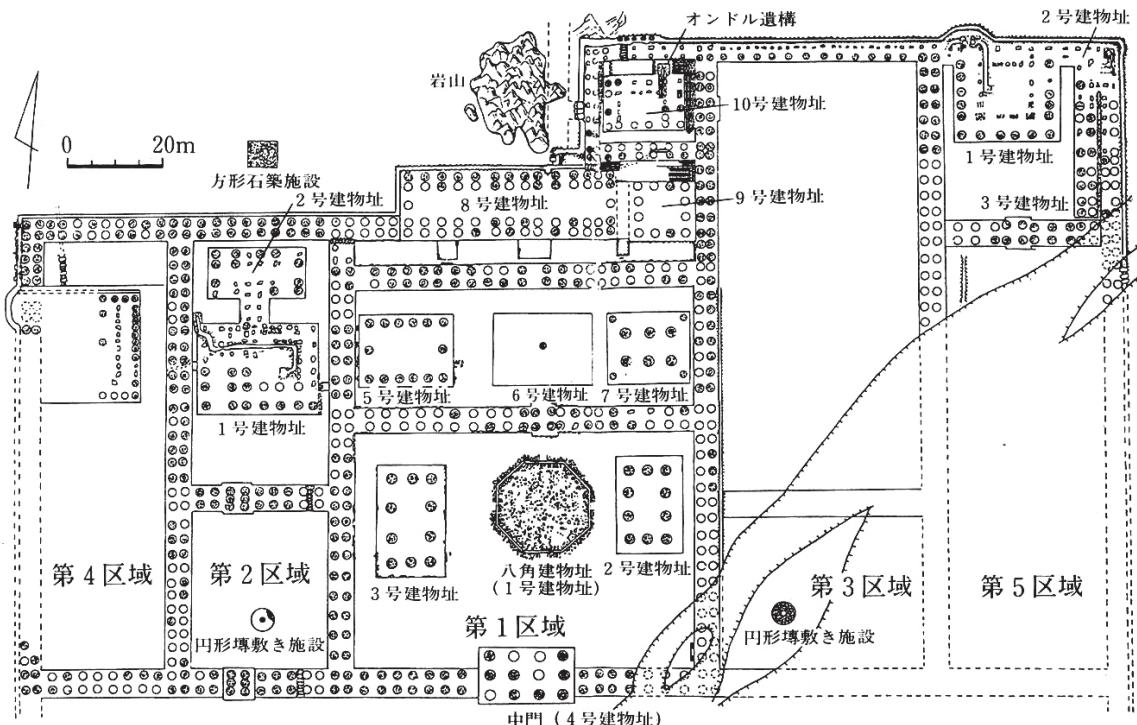


第2図 上五里寺址八角形建物址

建つ、と考えているが（李ファソン 1989）⁽²⁾、八角形建物の内部構造については、李陽浩が指摘するように、2つの形態があり、その1つは、四角形である（李陽浩 2004）。外形八角形で、内部に四角形の内陣等があつたとみることは十分に可能である。その場合には、八角形建物が何層にもなることは考えがたいが、単層か重層かは別にして、八角形建物を塔址とみることに問題はないであろう。

3) 定陵寺址

平壌市力浦区域戊辰里王陵洞にある。背後（北）の丘陵には高句麗の古墳群（真坡里古墳群）があり、とくに寺址のすぐ北 150 m 離れて伝東明王陵がある。寺址の一帯が、瓦片の散布地であることは知られていたが、1974 年に伝東明王陵とあわせて発掘され、遺構が確認された（金日成綜合大学 1976）。（第3図）



第3図 定陵寺址平面図

はじめに指摘しておくべきことは、寺名についてである。「定陵」「陵寺」という銘のある土器片が発見されたため、それをもとに「定陵寺」という寺名であったと推定されたのであるが、「陵寺」銘土器片の「陵」字の上に残る字画を「定」の一部とみるのは難しい。とすれば、これまで疑問がもたれていないが、はたして「定陵寺」であったとみてよいのかどうか、きわめて疑問である。現状では、確実な「陵寺」をとるべきであり、また「陵寺」は一般名詞であったかも知れない。それが伝東明王陵と関わるものであることは疑いなく、その陵寺ということで、なんらおかしくない。ただここでは、便宜上、通称にしたがっておく。

発掘は、東西 233 m、南北 132.8 m の範囲で行われた。中門とみられる門址をはさむ東西の廻廊よりも北側部分で、周囲は廻廊と、その外側の石組みの水溝に囲まれている。18 の建物址と多くの廻廊が検出された。寺域は南側にもう少しのびるものとみられる。

南北の廻廊によって、五つの区域にわかれ、中央を第一区域とよぶ。とうぜん伽藍の中心で、中門址（4号建築址）に入ったすぐに八角建物址がある（1号）。一辺 7.3 m の基礎部分は全面に 10 ~ 20cm の石を敷き、礎石は残っていなかった。その外側の幅 80cm 部分には石を敷かず両側に板石をたてる。その外側に雨落溝とみられる幅 60cm の石敷きがめぐる。その外辺で一辺 8.4 m ある。その東西南北四面は、中央を石敷きしないが、南北では幅 1.3 m、東西では幅 2 m ある。階段のあととみられる。

八角建物址の東には 5.5 m、西には 9.2 m はなれて、それぞれ正面 3 間、側面 2 間の南北に長い建物址が

あるが、柱間は同じではなく、東（2号）は南北20.05m、東西13.4mで、西（3号）は南北22.8m、東西13.8mと、西の建物址が大きい。左右対称ではない。礎石そのものは残らないが、根石は残っている。北には4.4mのところに幅6.8mの東西の廻廊があり、清岩里寺址の伽藍配置とは異なる。ただし、廻廊をはさんで、八角建物址からは16m北に、建物址を想定し、それを北の金堂として、やはり一塔三金堂式とみるのが、報告書の見解である。この建物址（6号）は、南北に土留め石がいくつか残るにすぎず、礎石も根石も残っていない。田村晃一は、これを建物址と認めず、また廻廊がさえぎることなどから、一塔二金堂式ではないかとする（田村1983）。それに対して韓仁浩は、ここは発掘前に民家と井戸があったため破壊がはなはだしいが、土留め石は南北の基壇石で、また建物址中心部北よりにある円形の基礎施設は、仏像台座の基礎であるから、金堂とみてよい、とする（韓仁浩1986）。報告書では、この建物址を東西17.8m、南北14.8mと推定する。この東西には、東西に長い建物址がそれぞれあり、東（7号）は四隅に根石があり、その内側に東西に3個2列の根石がある、特異な構造で、鐘樓かとされる。西（5号）は内部の空間が広く、経樓かとされる。北にまた廻廊が走り、その北に東西44m、南北14.5mの長い建物址（8号）があるが、位置から講堂址とされる。北側には水溝があり、その背後は庭園遺構とみられる岩山である。その東（9号）と東北（10号）にも建物址があり、東北のは廻廊に囲まれたなかにある。廻廊と建物址のあいだを塹敷きし、内部には瓦塼を用いたオンドル施設がある。報告書では高位者の寝室かとみる。

遺物は、鳴尾・瓦当を含む瓦塼類や甕・壺などの土器が多く、平瓦には「寺」「泉」「定」などの刻印のあるものもあり、土器にはさきにふれた「定陵」などのほか、「衆僧」「飛」「惠堪」「小玉」などヘラ書きの銘のあるものもある。ほかに鉄釘・鉄鉢や、「復興」銘のある青銅製の刀子鞘、円面硯、玉類などが出土している。

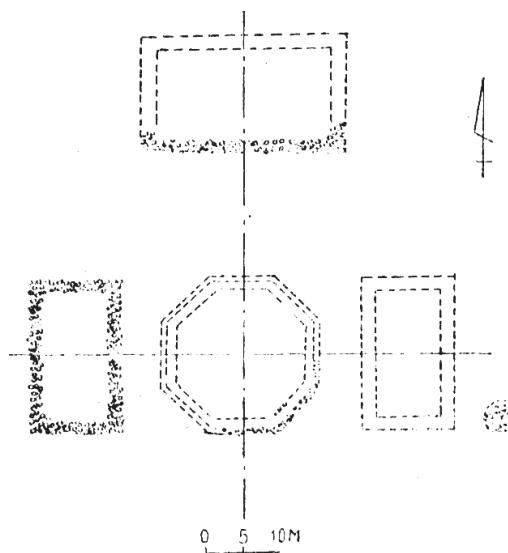
報告書では、平面構造から清岩里寺址よりも古いとしているが、根拠が不確かである。伝東明王陵を平壌遷都を前後する時期すなわち5世紀前半とみる年代観とも関わるのであろう。田村晃一は出土瓦が清岩里寺址のものよりも型式的に新しいとみ、清岩里寺址を金剛寺にあてる前提のもとで、定陵寺を6世紀前半以後の創建とする（田村1983）。清岩里寺址自体の年代がまだ不確定であるから、それをもとにした年代限定はむずかしいが、前後関係は認めて問題ない。伝東明王陵は、石室構造からみると、5世紀後半が妥当であろう。永島暉臣慎は長寿王（491年薨去）の寿陵とするが（永島1981）、「陵寺」の背後にあることから王陵であることは確実であり、始祖東明王の陵を移葬したのでなければ、そのようにみるしかない。長寿王陵でよければ、陵寺は491年以後の創建ということになる。

4) 土城里寺址

黄海北道鳳山郡土城里で、1987年に紹介された。鳳山駅から南に1kmの協同農場の脱穀場の近くで、東南の傾斜面に土城がある。北3kmには高句麗の鶴鶴山城がある。

ここでも八角建物址が検出された（第4図）。八角基礎部分の周縁には一辺7.7mに板石をならべる。内部は攪乱され、何も残っていない。その外側1.15mあけて、幅70cmの雨落溝がある。河原石敷きで、両辺に粘板岩の板石を直線にならべる。南面の中央には、幅80cm、長さ85cmのほぼ方形の花崗岩が残るが、通路の痕跡であろうか。雨落溝外辺で一辺9.1mになる。

西側に7.4m離れて長方形の建物址があった。南北18m、東西9.1mで、周囲にはやはり雨落溝とみられる幅1.4mの河原石敷きがめぐる。建物基礎には石敷きはない。北側



第4図 土城里寺址平面図

には 18.2 m 離れて、建物址の南辺が残る。やはり雨落溝とみられる幅 1.8 m の石敷きがある。東側は破壊がはなはだしく、遺構が検出されなかった。東南側には 36 m 離れて、博を敷いた円形の施設があった。残存するのは直径 2.5 m 部分である。

遺物は瓦がほとんどで、八角形建物址を中心に出土した。ほかに土器片・釘類もあった。瓦は、瓦当が三種類で、そのひとつは平壌の土城里出土瓦当に似ているものがある。平瓦は繩目と格子目がある（南イルリヨン 1987）。

報告者の南イルリヨンは、この地域が 4 世紀末に高句麗領になったとし、寺はそれからまもないころの建立とみているようであるが、出土瓦の紹介・分析をまちたい。

以上のように、高句麗の寺院ではこれまで八角形建物址が 4 カ所で検出されている。伽藍配置については、すべてが一塔三金堂式であったのかどうかには疑問も残るが、八角形建物址自体は、いずれも塔址と考えて問題ないであろう。

そのような八角形の木塔に関する記録はないが、『三国遺事』卷 3・高麗靈塔寺条には、次のような記事がある。

僧傳に云わく、「釋普徳、字は智法。前高麗龍岡縣の人なり」と。詳らかには下の本傳に見ゆ。常に平壌城に居る。山方の老僧有り、來たりて經を講ぜんことを請う。師、固く辭するも免かれず、赴きて涅槃經四十餘卷を講ず。席を罷め、城の西なる大賓山の嵐穴の下に至り禪觀するや、神人有り、來たりて請う、「宜しく此の地に住すべし」と。乃ち錫杖を前に置き、其の地を指さして曰わく、「此の下に八面七級の石塔有り」と。之を掘るに果たして然り。因りて精舎を立てて靈塔寺と曰い、以て之に居る。

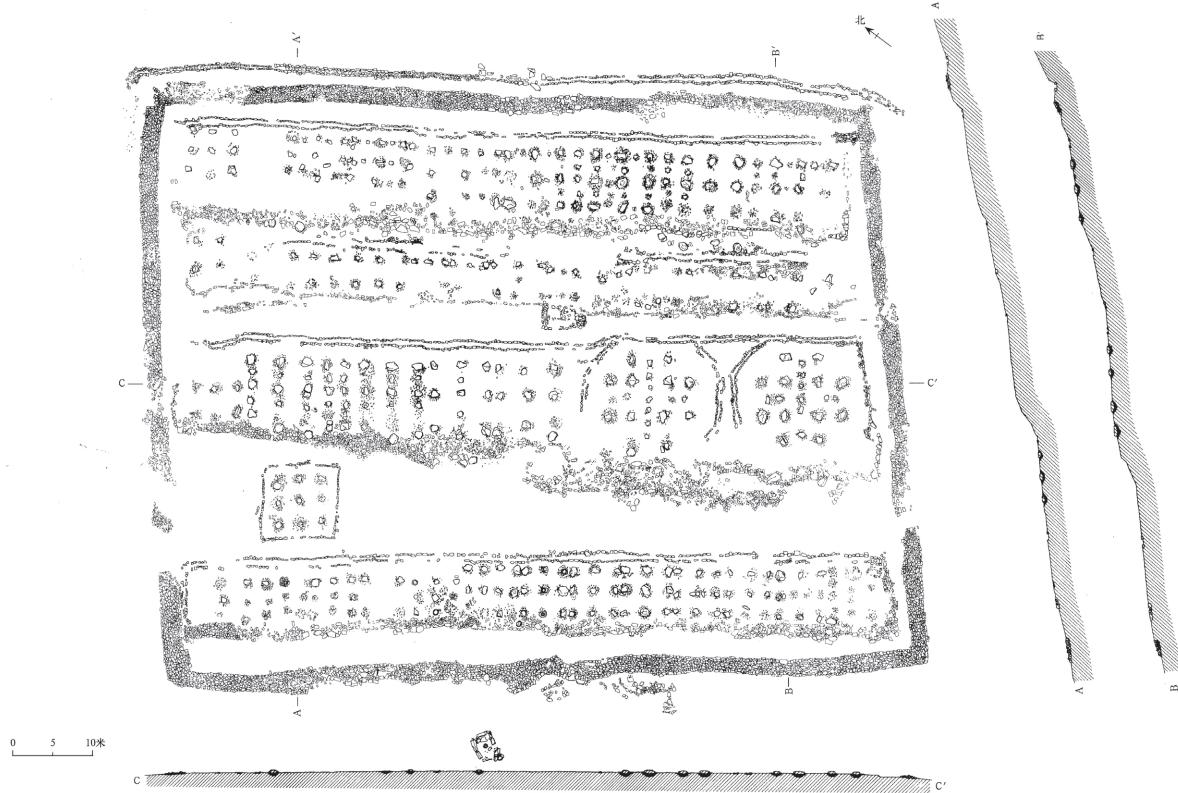
ここで「八面七級の石塔」というのは、八角七層の石塔を指している。高句麗の仏塔の基本的形態は八角であったと考えてよいであろう。

(2) 「丸都山城」八角形建物址

高句麗第二の都が置かれていた国内（丸都ともいう）は、現在の中国吉林省集安市にあたる。現地で丸都山城とよばれる山城があり、その城内で八角形建物が 2 棟検出されている（第 5 図）。

吉林省文物考古研究所・集安市博物館が 2001 ~ 2003 年に発掘したもので、報告書では宮殿址とする大型建物址のなかにある（吉林省文物考古研究所・集安市博物館 2004）。南門から入って 460 m 東北の傾斜面に大型建物址があり、4 段に築壇している。その下から 2 段目（2 号台基）の、正面右より（南側端）に 2 つの八角形建物址がならんでいる。2 号台基は、2001 年に発掘された。2 棟の八角建物址は、向かって左（北側）が 2 号建築址、右（南側）が 3 号建築址とされる。2 号建築址は、大小 23 個の礎石が残り、大きめの 8 個が八角形をなす。その 1 辺の長さはおよそ 3.2 m で、八角形は南北 12 m、東西 11.2 m ある。その内側にやはり大きめの 4 個の礎石が四角形をなし、その 1 辺は 3.1 m である。小さめの礎石は、八角形・四角形の中心部に縦横に直交するかたちで並んでいる。3 号建築址も、ほぼ同様で、22 個の礎石が残り、八角形の 1 辺は 3.2 m、四角形の 1 辺は 3.1 m である。ともに地山を含めて 5 層に分かれ、地山の上の第 4 層が 0.15 m つきかためた層で、そこに建物が創建され、第 3 層は第 1 次、第 2 層は第 2 次の廃棄層、最上の第 1 層は近現代の磁器片を含むという。創建年代も廃絶年代も同じで、3 世紀初めに創建され、火災で焼失したとみている。焼失は、慕容氏によって王都が陥落した 342 年とする。

ここで高句魔王都の変遷についてふれておけば、先に清岩里土城が、平壌前期時代（427 ~ 586）の王城とみられることについて述べた。高句麗は、427 年に平壌へ遷都するのである。それまでは、この集安に都が置かれていたといえるが、わたしは慕容氏による王都陥落後、死を免れた故国原王が一時的に平壌に



第5図 丸都山城大型建物址平面図

避難したとみている（田中 2004）。王都としては基本的に集安としてよいのであるが、371 年の故国原王の戦死とともに避難が解消されるまで、二重王都であった。

そもそも高句麗の王宮は、平地にあったとみるべきで、集安に王都があった時期においても、いわゆる国内城（通溝城）の中心部に王宮があったと推定される。山城の中に常設的な王宮があったとは考えがたい。報告書でも、「宮殿址」にオンドル施設などがみられないことから、夏宮的なものを想定している。しかし、時に王がやってくる行宮的なものはあってもおかしくはなく、「宮殿址」をそのようにとらえるのであれば、可能であるといえる。2つの八角建物址は、位置からすれば、その大型建物址のなかの中心をなす建物ではない。あくまでも付設の建物とみるべきである。それを中心に、大型建物が建てられているわけではないのである。

上記のような王都変遷を認めれば、342 年に焼失したあとも、丸都山城は重要な「逃げ城」でありつづけたのであり、なかに行宮的なものが再建されてもおかしくない。果たして、342 年焼失というみかたが妥当であるのかどうか、瓦当の年代観をはじめ、精査が必要があると考える。

この2つの八角形建物址について、始祖廟であるという理解がある（崔光植 2006）。その場合、みてきたように、高句麗の八角建物址が多く仏寺の塔であり、そのこととどのように関わるのか。高句麗の公式佛教伝来は 372 年であり、342 年焼失の建物であることをふまえれば、丸都山城の八角建物は、佛教伝来以前であるから想定外である、というみかたが一般的なようである（李陽浩 2004, 崔光植 2006）。しかし、焼失の年代が降れば、そうした理解が成り立たなくなる可能性もある。ここでは、そのような消去法ではなく、行宮的な建物の中にある八角建物の性格として別途検討すべきであると考える⁽³⁾。

そこで高句麗の始祖廟について整理をしておきたい。

『三国史記』における始祖廟の記事は、まず祭祀志に、「古記」を引いて、

東明王十四年（前24）秋八月、王母柳花、東扶餘に薨す。其の王金蛙、大后の禮を以て之を葬る。遂

に神廟を立つ。

大祖王六十九年（121）冬十月、扶餘に幸し、大后の廟を祀る。

新大王四年（168）秋九月、卒本に如き、始祖廟を祀る。

故國川王元年（179）秋九月・東川王二年（228）春二月・中川王十三年（260）秋九月・故國原王二年（332）春二月・安臧王三年（521）夏四月・平原王二年（560）春二月・建武王二年（619）夏四月、並びに上の如く行う。

とある。これと対応する記事が、高句麗本紀の各条にみえており、該当箇所のみを列記すれば、次のとおりである。

- 〔東明王〕十四年（前24）秋八月、王母柳花、東扶餘に薨す。其の王金蛙、太后の禮を以て之を葬る。遂に神廟を立つ。
- 〔太祖六十九年（121）〕冬十月、王、扶餘に幸し大后的廟を祀る。
- 〔新大王〕三年（167）秋九月、王、卒本に如き、始祖廟を祀る。冬十月、王、卒本より至る。
- 〔故國川王二年（180）〕秋九月、王、卒本に如き始祖廟を祀る。
- 〔東川王〕二年（228）春二月、王、卒本に如き始祖廟を祀る。大赦す。
- 〔中川王〕十三年（260）秋九月、王、卒本に如き始祖廟を祀る。
- 〔故國原王〕二年（332）春二月、王、卒本に如き始祖廟を祀り、百姓老病を巡問し賑給す。三月、卒本より至る。
- 〔安臧王〕三年（521）夏四月、王、卒本に幸し始祖廟を祀る。五月、王、卒本より至る。經る所の州邑の貧乏なる者に穀を賜うこと人ごとに一斛。
- 〔平原王二年（560）春二月〕王、卒本に幸し始祖廟を祀る。三月、王、卒本より至る。經る所の州郡の獄囚、二死を除き皆な之を原す。
- 〔榮留王（建武）二年（619）〕夏四月、王、卒本に幸し始祖廟を祀る。五月、王、卒本より至る。

祭祀志と異同があるものが二例あるが、大きな問題はない。これらによれば、始祖の母柳花の神廟（大后廟）が東扶餘に立てられ、また始祖廟が立てられたという記録はないが、最初の王都である卒本（遼寧省桓仁）にあったようである。以後の王で、卒本に行幸して、始祖廟を祀る例が多い。平壤遷都以後も、同様に卒本まで行幸していることが注目される。

卒本における廟についてあるいは関わりがあるかとみられるのは、桓仁鎮の東北30km、富爾江の東側の拐磨子郷東古城子村の南約1kmの田地で1980年に発見された高句麗時代の建築遺構である。磨製石斧・平瓦・土器片などが散布する。遺構は長さ約50m、幅約20mで、瓦を用いているものの、規模が小さいことから、寺廟ではないかとされる（桓仁満族自治県文物志編纂委員会1990）。

しかし、始祖廟や始祖母廟が卒本や東扶餘にのみ置かれていたわけではない。

『周書』高麗伝には、

佛法を敬信し、尤も淫祀を好む。又た神廟二所有り。一を夫餘神と曰う。木を刻みて婦人の象を作る。一を登高神と曰い、是れ其の始祖にして夫餘神の子と云う。竝びに官司を置き、人を遣わし守護せしむ。蓋し河伯の女と朱蒙なり、と云う。

とあり、夫余神・登高神（『北史』高句麗伝では「高登神」）というのが祀られていることがみられる。

これによれば、登高神（高登神）とは、高句麗の始祖である朱蒙を、夫余神とは朱蒙の母という河伯のむすめを、それぞれ祀るもので、周代（557～581）の高句麗にその2つの神廟があったということである。

これは、王都における神廟の存在を伝えているとみるのが自然であろう。この当時、王都はすでに平壤に移っており、上記のように、前期平壤時代に該当する。すなわち大城山城一帯に王都があった時期で、王宮

は清岩里土城にあったと考えられる。もし2神廟があったとすれば、その王宮にあったか、もしくはその附近と考えられ、王都平壤にあったことはまちがいないであろう。

しかし『新唐書』高麗伝には、太宗率いる唐軍が遼東城を囲んだとき（645年）のこととして、

〔遼東〕城に朱蒙の祠有り、祠に鎖甲・銛矛有り。前燕の世に天より降りし所なりと妄言す。圍むこと急なるに方りて美女を飾りて以て婦神とす。誣、朱蒙悦び城必らず完とからんと言う。

とあり、遼東城にも朱蒙祠と婦神祠があったという。婦神は急遽造られたものようで、始祖母廟でもないが、少なくとも始祖朱蒙の祠堂は、地方にもあったということである。

始祖廟・始祖母廟が高句麗の滅亡まで存続したことは、当然である。集安は、平壤遷都後も、高句麗三京のひとつとして重要拠点でありつづけ、滅亡直前には泉男生がここに拠って、弟男建・男產と対立したことでも知られるが、十分に機能していた。遼東城にもあったように、ここにも始祖廟があり、また始祖母廟もあつたと考えて問題ない。

2つの八角形建物址が、始祖廟・始祖母廟であるとみる場合、それが途中で焼失したのであれば、それ以後の移転をも前提にして、考える必要がある。

ところで、『旧唐書』高麗伝には「其の俗、淫祀多く、靈星神・日神・可汗神・箕子神に事う。國城の東に大穴有り、神隧と名づく。皆な十月を以て王自ら之を祭る」とあり、『新唐書』高麗伝には「俗、淫祠多く、靈星及び日・箕子・可汗等の神を祀る。國の左に大穴有り、神隧と曰う。毎に十月に王皆な自ら祭る」とある。

靈星神は、『魏志』高句麗伝にすでに「居る所の左右に於いて大屋を立て鬼神を祭る。又た靈星・社稷を祀る」とみえている。靈星とは、ほんらい星の名で、天田星ともいい、稼穡をつかさどる。そのため「靈星神」は一般に農業神とされる。「可汗神」は、両唐書以外にはみられない。可汗とは突厥の首長号であるが、突厥伝などにも「可汗神」はみられない。高句麗と突厥とは、関わりがあった。隋の煬帝が、大業三年（607）、突厥の啓民可汗のもとを訪れた時、高句麗の使者も、そこに来ており、そのことに驚いた煬帝は、高句麗の使者に対して、隋が王の朝見を求めていることを伝えさせた、という記録が残る（『隋書』高麗伝）。「箕子神」であるが、箕子については、殷の紂王の親戚で賢人として知られ、周の武王が殷を倒して周を建国すると、箕子を訪ね教えを請うたといい、『尚書』（書經）の洪範は、その時に箕子が述べたことという。それはもちろん、後世に箕子に仮託して、天地の大きな定め、綻についてまとめたものであるが、一般に箕子とは、そのような殷末における、王族で、賢人として知られている。この箕子が朝鮮の王になった、朝鮮で国を開いた、という伝説は、漢代の記録からあらわれるが、事実とは考えられない。そのような箕子が、なぜ高句麗において、急に唐代になって祀られるようになったのか不可解である。

丸都山城の八角建物址に、これら靈星神・日神・可汗神・箕子神が祀られている可能性も排除できないが、2つのみである点からすれば、高句麗にとって最も重要と考えられる始祖廟というのがより可能性が高いといるべきであり、その横に、始祖母廟があつてもおかしくない。

以上、丸都山城の八角建物址については、遷都以前に行宮であったとみられる大型建物の中に位置していくことから、始祖廟・始祖母廟である可能性は十分にあり、その可能性は高いといふことができる。しかし地方拠点にも始祖廟が祀られていた例からすれば、342年以後、427年の遷都まではいうまでもなく、遷都以後においてもこの地に存続していたと考えておかしくない。移転したという想定を前提として位置づけておく必要がある。

3. 新羅の場合

（1）新羅寺院

新羅においても、寺院に八角形建物があったことが知られている。それは、靈廟寺址にあった。慶尚北道

慶州市沙正洞の現在「天鏡林興輪寺」と称する寺の一帯である。この靈廟寺址は、以前には興輪寺址であるとみなされていた（藤島 1930）。しかしそれはまちがいで、出土銘文瓦や後代の文献資料等によって靈廟寺址にあたることはまちがいない（田中 1988）。

この現在の興輪寺において、1978 年に西塔址、1981 年に東塔址が発掘調査された。東塔址は、基壇全体の平面が一見すると不整形な円形にみられるが、東側と東北側に残っている面からみるとほんらいは八角形であったと推定できた。直径は約 10.5 m で、1 辺は約 4.5 m 内外と推定される。西塔址では、基壇外周から約 2 m 外側に離れて 1 辺 7.7 m の八角形にめぐっている地台石の根固め石の群が発見されたが、東塔址にはなかった。東塔址のほうが削平されているためである。

『新增東国輿地勝覽』卷 21・仏宇・靈妙寺には「殿宇三層、体制殊異なり。羅時の殿宇一に非ざるも、他は皆な頽毀し、獨り此れのみ宛然として昨の如し」とある。これによれば、『勝覽』の 15 世紀当時、靈廟寺には「殿宇三層」のみがなお存していたようである。「三層」の「殿宇」ということであれば、塔を指している可能性がある。朝鮮王朝時代の金時習（1435～1492）の詩に「登靈廟寺浮図」というものがあり、分注に「惟だ一つ木の浮図のみ独り存す」とある。また、金宗直（1431～1492）の詩にも「雲梯回上最高層」「落日亭亭淡五陵」の句がある。雲梯とは塔のことで、その最高層に登って、落日が五陵を淡くそめているのをみて詠んだものであろう。このような三層の塔が、新羅時代までさかのぼるものかどうか、まったくわからない。新羅時代における靈廟寺塔の記録はないのである。

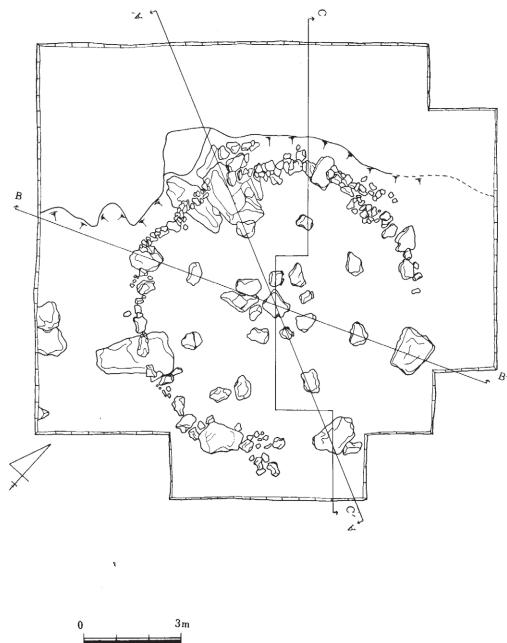
新羅寺院において、このように八角形の塔の存在が確認できたのは、ここのみである。

（2）新羅山城

新羅時代に築造されたと考えられる山城のいくつかに、八角形建物址が検出されている。検出された年代の順にみていく。

1) 二聖山城

二聖山城は、京畿道河南市春宮洞・草二洞・広岩洞に位置する。漢陽大学校博物館によって、1886～2004 年に発掘調査がなされた（裴基同ほか 2006）。そのうちの 1987 年の 2 次発掘調査において、八角形建物址（第 6 図）が検出された。70 × 50 × 20cm の礎石を中心にして、その外側に 3 重に礎石がめぐっている。最も外側には、中心から 440cm 離れて、8 個の礎石がめぐる。それぞれの石は 340cm 間隔である。その内側に、中心から 270cm 離れて、やはり 8 個の礎石がめぐる。こちらはそれぞれ 205cm 間隔である。そして最も内側に、中心から 1 m 離れて 4 個の礎石が東西南北の方位と一致する位置にならぶ。その 4 個の礎石のあいだそれぞれに卵形の石が 4 個立てられている。中心礎石のまわりを八角形が 3 重に囲むかたちである。卵形の 4 個の石は礎石ではなく、建物の構造とは無関係で、儀式的な意味があるのではないかとされ、社稷壇の中央の石主のような意味があるのではないかという。この八角形建物址から東に約 70 m 離れて、九角形建物址も検出された。そちらは天壇ではないかという（金秉模・沈光注 1988）。



第 6 図 二聖山城八角形建物址

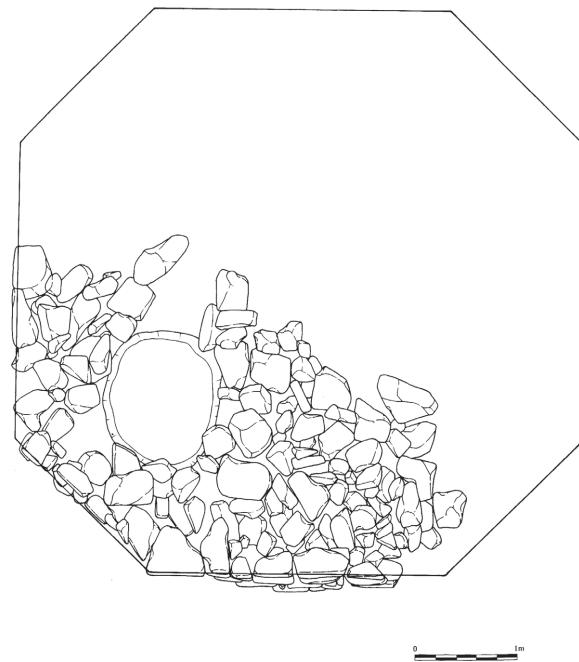
二聖山城は、そもそも百濟前期王都漢城と関連する遺構が確認できないかという目的で調査が始まられたが、結局、百濟時代の遺物は出土せず、また6世紀半ばの新羅木簡が出土したこともあり、6世紀半ば、新羅が進出してきた当初に築造された、新羅山城であることが明らかになった（沈光注2006）。

2) 雪峰山城

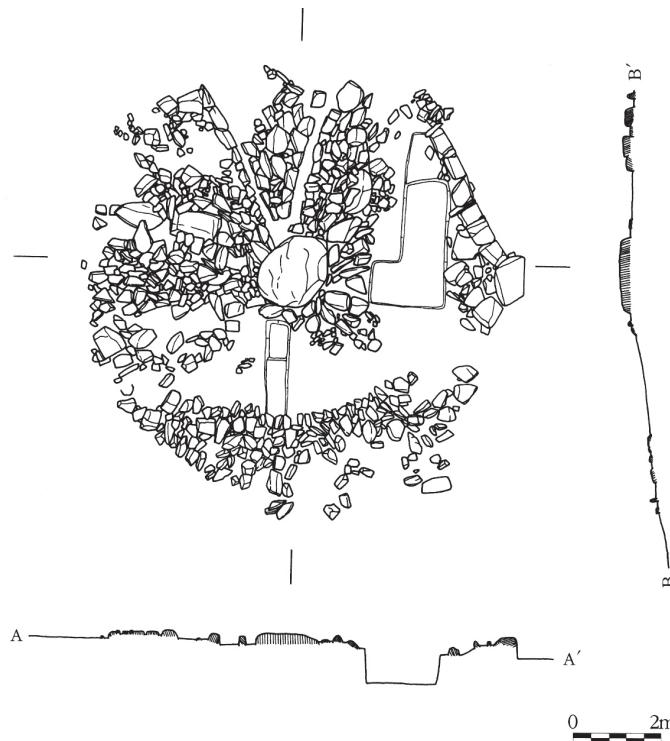
京畿道利川市官庫洞と沙音洞に位置する。当初、檀国大学校中央博物館が、のちには檀国大学校埋蔵文化財研究所が主体となり、7箇年かけて長期調査および整備計画を立てて行われた。最初の1次発掘調査は1998年に実施された。その後、2005年の6次調査まで継続して実施された。八角形建物基壇は1次発掘調査で確認されている（第7図）。八角形の2辺の石築のみ残っていた。45度の角度をしており、八角形に復元される。残っている2辺は東北にあたる。内部には割石が不規則に残るのみで、礎石や石列は確認できなかった。現在残る石築の規模は、東西4.4m、南北5.5mである。その内部には直径123cm、深さ52cmの陥没があり、何らかの構造物があったものと推定される。基壇は、面を整えた石材を利用して外側に積みあげ、内部に割石と土をいれて固めている。ほかに根固め石や礎石の痕跡がなく、出土遺物に瓦類がほとんど発見できないのに土器類が集中的に出土していることから、祭壇の性格ではないかと推定された（檀国大学校中央博物館1999）。

3) 望夷山城

京畿道安城市一竹面金山里に位置する。檀国大学校中央博物館が1978年に地表調査を、1994年から檀国大学校埋蔵文化財研究所が発掘調査を進めている。2005年の第3次調査において、城内の2つのヘリポートが造られた峰の間の平坦地の、竪穴遺構南側で八角形建物址が検出された（第8図）。残りの状態はよくなく、180×135×40cmの心礎石とよぶ石を中心にして、八角形基壇の1辺の基壇と、暗渠施設の一部が残るのみである。建物内部は石材で埋められていた。心礎石は、三角形で、扁平な面を上にして、角は整えている。基壇は北東側のみ、1～2段残る。暗渠施設は、心礎石を中心に各基壇列の方向に、側壁石と蓋石で構成されたもので、3列のみ残る。以上まとめれば、八角形建物址は、



第7図 雪峰山城八角形建物址



第8図 望夷山城八角形建物址

中央に心礎石を置いて、外に 8 個の礎石と 1 ~ 2 段の基壇列、また各基壇列と対応する暗渠施設を設置した構造の建物であることになる。心礎石の存在から少なくとも 2 層以上の建物であったと推定できる（檀国大学校埋蔵文化財研究所 2006）。

二聖山城の場合は、卵形の石が中央部に 3 個配されていることによって、社稷壇ではないかという推定がされている。望夷山城の場合は、中央部に大きな石があり、それを礎石として、2 層の祭壇と推定されている。

ここで、社稷壇について考えておきたい。まず高句麗の例として、『三国史記』卷 18・高句麗本紀 6・故国壤王 9 年（392）条に、

三月、教を下し佛法を崇信し福を求めしむ。有司に命じ國社を立て宗廟を修せしむ。

という記事がある。中期王都集安において、いわゆる国内城（通溝城）の東 500 m に、東西に細長い台地があり、その上は古くから赤色瓦片が散布していた。東台子遺跡とよばれる。1958 年に吉林省博物館が発掘し、廻廊でつながった 4 つの建物址が検出された。中心的な I 室は東西 15 m、南北 11 m の長方形で、周縁は 1.5 ~ 2 m 幅で黄土と河原石をつきかため、その上に礎石を置く。その周囲を廻廊がめぐり、その外に、根固め石が残り、二重円形につくりだした方形や円形の礎石が残るところもある。

室内中央には、縦横 0.8 m × 0.6 m で高さ 1 m の石柱を置く。地表下に 0.4 m 埋め、上には 0.6 m 出す。そのまわりも河原石で固めている。東壁南よりに炉址があり、灰土・赤焼土・瓦片で埋まり、付近から土器片・鉄鍋片などが出土した。煙道が壁にそって北から西へとのび、西北隅から室外に出、北にのびて煙筒に達する。幅 70cm、高さ 25cm、長さ 22 m あり、底は瓦片を敷き、上は 2 ~ 3cm の薄い板石でおおう。室外では上を 5 ~ 10cm の板石でおおっている。煙道内の灰は少なく、日常的には使われなかつたようである。

この遺構の性格について、報告者の蘇才は、宮室か社稷を祭るところではないかとしたが、壮麗な建築址であるからというほどの理由でしかなかった（蘇才 1961）。それに対して方起東は、I 室中央の石柱に注目し、『周礼』鄭玄注・『呂氏春秋』『淮南子』などの中国古典文献で、社の神主として石を用いる例を確認し、江蘇省銅山丘湾の社址とみられる遺跡とも対比して、社主であろうと考え、I 室を地母としての社を祭るところ、隣接する II 室を農神である稷を祭るところと推定し、出土瓦当の年代観をふまえて、上記の「国社」にあてた（方起東 1982）⁽⁴⁾。

江蘇省銅山丘湾の社址とみられる遺跡については、俞偉超が、古典文献をもとに社のあとであると推定したものであるが（俞偉超 1973）、『周礼』春官・小宗伯の鄭玄注に「社主は蓋し石を用て之と爲す」とあり、『呂氏春秋』貴直論に「城濮の戦いに、五たび荊人を敗る。衛を囲み曹を取り石社を抜き、天子の位を定め、尊名を天下に成す」とあり、『淮南子』齊俗訓に「殷人の礼、其れ社に石を用う」とある。これらは、社主として石を用いていたことを示している。丘湾遺跡も、集安の東台子遺跡も、中央に石柱を置いていることが社稷とみる決めてになっている。

そこで、これら山城に関わる新羅の場合であるが、『三国史記』卷 32・雜志 1・祭祀に、

第三十七代宣徳王に至り、社稷壇を立つ。

とある。新羅本紀に対応する記事はない。『東国通鑑』卷 10・宣徳王 4 年（783）条に「社稷壇を立て、又た祀典を修む」と年代を限定し、祀典のことも記すが、拠り所があったかどうかわからない。祭祀志にはつづけて、

又た祀典を見るに、皆な境内の山川にして天地に及ばざるは、蓋し以うに、王制に曰わく、「天子七廟、諸侯五廟。二昭二穆と太祖の廟にして五なり」と。又た曰わく、「天子は天地、天下の名山大川を祭り、諸侯（侯）は社稷、名山大川の其の地に在る者を祭る」と。是の故に敢えて禮を越えて之を行わ

ざるか、と。然れども其の壇堂の高下、壇門の内外、次位の尊卑、陳設登降の節、尊爵・籩豆・牲牢・冊祝の禮、得て推すべからざるなり。但だ其の大略を粗記すと云う爾。

とある。社稷壇の祭祀は、ここに引く『礼記』王制篇の記事や、同じく『礼記』の礼運篇に「故に天子は天地を祭り、諸侯は社稷を祭る」とあるように、諸侯の礼に則ったものである。祭祀志には、名山大川の祭祀はみえるが、天地祭祀はみえない。それは、天地祭祀が皇帝のみに許されたもので、新羅王は諸侯として、分を越えて行わなかつたことに拠るのであろう、といふのである。

その通り、少なくとも統一以後の新羅において、唐の皇帝に配慮して、天地の祭祀は行わず、名山大川、そして社稷のみを祀った、と認めることができる。

ただし、統一以前において、そのような規制をしたかどうか。二聖山城の場合は、卵石と称するものが散乱するようなありかたであり、果たして社主とよべるようなものととられることができると疑問であるが、望夷山城の場合、大きな石は社主にあたると認められるのではないか。とすれば、その限りで、社稷を祀つたとみることが可能ではないかと思われる。ただし、王都からかなり離れた、地方の山城において、王が祭祀を行うために行幸したかといえば、むしろ疑問が生じる。そもそも社とは土地の神であり、地方であって土地を祀る祭祀が行われていたということになろうか。

二聖山城の場合、九角形建物址を天壇と推定しているが、天を祀ることは、いっそう困難であろう。

(3) 「蘿井」八角形建物址

蘿井とは、新羅の始祖朴赫居世が降誕したところとして知られている。『三国史記』卷一・新羅本紀一・赫居世居西干即位紀には、

始祖。姓は朴氏。諱は赫居世。前漢孝宣帝の五鳳元年甲子（前五七）四月丙辰【一に正月十五日と曰う】、位に即く。居西干と號す。時に年十三。國、徐那伐と號す。是れより先、朝鮮遺民、山谷の間に分居して六村を爲す。一に閼川楊山村と曰い、二に突山高墟村と曰い、三に觜山珍支村【或るいは干珍村と云う】と曰い、四に茂山大樹村と曰い、五に金山加利村と曰い、六に明活山高耶村と曰う。是れ辰韓六部たり。高墟村長蘇伐公、楊山麓なる蘿井の傍らの林の間を望むに、馬有り跪きて嘶く。則ち往きて之を觀るに忽ち馬を見ず。只だ大卵有り、之を剖けば嬰兒有りて出づ。則ち收めて之を養う。年十餘歳に及び、岐嶷然として夙成す。六部人、其の生の神異なるを以て之を推尊す。是に至りて立てて君と爲す。辰人、瓠を謂いて朴と爲す。初め大卵の瓠の如くなるを以ての故に、朴を以て姓とす。居西干、辰、王を言う【或いは貴人を呼ぶの稱と云う】

とあり、蘿井の傍らの林の間に大卵があり、そこから出てきたのが赫居世であると伝える。

そうした伝承の地である蘿井が所在するところとして知られてきたのが、慶州市塔洞、南山の西北麓にある、いわゆる「蘿井」であった。

そこを中央文化財研究院が2002年から2005年にかけて発掘調査をしたところ、井戸の痕跡は確認されず、八角形建物址が検出された（第9図）。

発掘の成果は、次のように報告されている（趙詳紀ほか2008）。

(i) 竪穴遺構と溝状遺構・木柵、(ii) その溝状遺構を覆土したあと、その上部に築かれた平面円形の礎石建物、(iii) それらの遺構を覆土したあとに造られた一辺約8mの八角形建物址が確認された。それを大きく囲む、一辺50mの方形の垣牆も造られていた。このうち溝状遺構等の造成時期は初期鉄器時代とされる。その溝状遺構の覆土時期は、そこから出土した土器によって、6世紀初とされ、八角建物は、特に「儀鳳四年皆土」という銘文のある瓦片が多く出土しており、679年の造営とされた。そしてこの八角形建物については、「儀鳳四年皆土」銘瓦がこれまで雁鴨池（東宮）・月城など、王室と関連する遺跡から出土して

いることや、他の八角建物の類例等から、国家的な祭儀と関連するものと推定された。

なお、竪穴遺構を井戸とみなそうとする見解もあったが（李文炯 2005）、疑問も提示されており（李恩碩 2005）、単純にはいえない。現実には、井戸ではなかつたとみるべきである。

「蘿井」と伝承されてきたものが、実際には井戸ではなかったのであるが、李文基によれば、蘿井があらためて注目されるようになつたのは 15 世紀後半であり、そこが朝鮮時代のひとたちによって新羅の始祖の誕生

地であると認識されるようになったのは、当時そこが、そのような地であるという伝承があったことによるのではないか、という（李文基 2009）。

この遺構をどのように考えればよいのであろうか⁽⁵⁾。

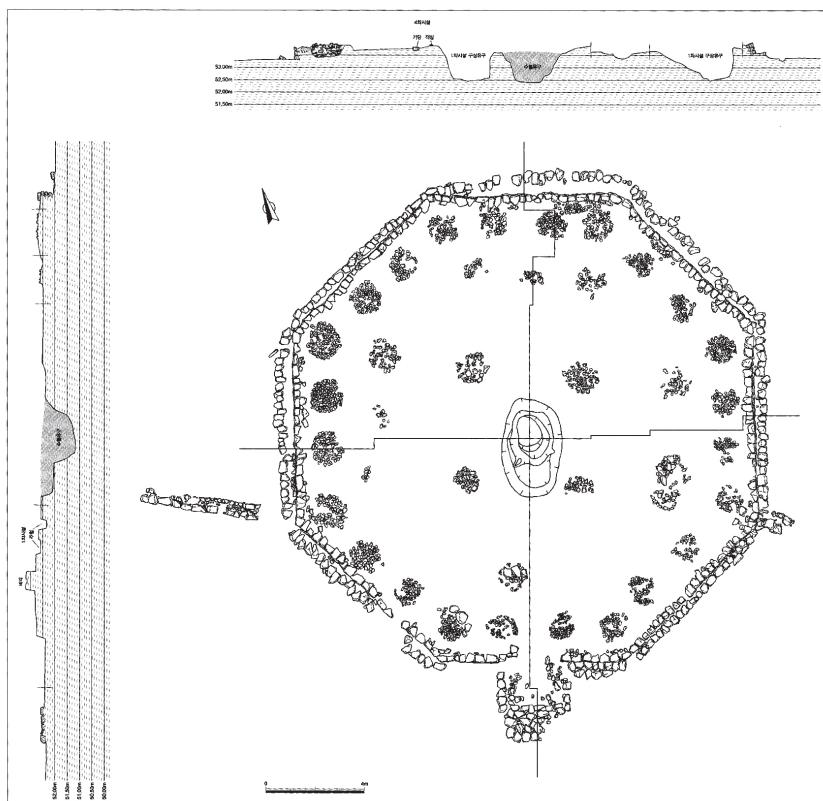
そのためには、新羅における始祖廟や神宮の問題について考える必要がある。

まず、始祖廟であるが、新羅本紀 1・南解次々雄 3 年（6）春正月条に「始祖廟を立つ」とある。第 3 代の儒理尼師今 2 年（25）春 2 月条に「親しく始祖廟を祀る。大赦す」とあるが、このち、炤知麻立干までの各王は、即位の翌 2 年もしくは 3 年に、始祖廟祭祀を行なっている。その点からみて、即位の儀礼の一環としてとらえることもできる。智證麻立干以後は、基本的に即位後に神宮祭祀が行なわれるが、それ以後でも哀莊王・憲德王・興徳王など始祖廟を祀ったことを記す王もいる。

新羅本紀 2・阿達羅尼師今 17 年（170）条に「春二月、始祖廟を重修す」とあり、修築がなされることがあり、また新羅本紀 3・炤知麻立干 7 年（486）条に「夏四月、親ら始祖廟を祀る。廟を守る二十家を増置す」とあり、守廟の家があること、およびそれが増置されることがあることを伝えている。

第 2 代の南解次々雄のときに「始祖廟」としているのであり、対象はとうぜん、朴氏の始祖赫居世ということになる。新羅は、王系が、朴氏から昔氏、さらに金氏へと交代するのであるが、昔氏・金氏の王が祀る場合も、同じく「始祖廟」としている（その場合、「謁す」とする例が少なくない）。新羅国の始祖、つまり國祖という意味であろう。金氏の味鄒尼師今が祀ったときには「國祖廟を祀る」としている。

それに対して、新羅本紀 4・智證麻立干 3 年（502）春 3 月（実は 1 月か 2 月）条に「親しく神宮を祀る」とあり、智證王代に神宮というものを祀ったことがみえる。しかし新羅本紀では、それが新羅王の神宮祭祀の最初ではなく、新羅本紀 3・炤知麻立干 9 年（487）春 2 月条に「神宮を奈乙に置く。奈乙は始祖の始めて生まれし處なり」とあり、17 年（495）春正月条に「王、親しく神宮を祀る」とみえる。神宮設置および神宮祭祀開始の年代について、新羅本紀と祭祀志とは大きく異なっているのである。



第 9 図 「蘿井」八角形建物址

邊太燮は、上掲した炤知麻立干7年（485）条に「親しく始祖廟を祀る。廟を守る二十家を増置す」とある記事を、神宮創建の準備段階とみ、17年条の記事までを一連のものとして、炤知麻立干代が妥当とした（邊太燮 1964）。崔光植は、炤知麻立干代に始置されたが、即位の礼として親祀したのは次の智証麻立干が最初であり、制度化は智証麻立干代であったとみた（崔光植 1983）。吉岡完祐は、智証麻立干が傍系から即位したため、最初に神宮親祀による即位儀礼を行なったが、神宮創設については、智証麻立干が炤知麻立干代の月城への還宮を機に新たな王朝がはじまったとの認識で、炤知麻立干代にさかのばらせて係年した、というように理解した（吉岡 1983）。

この神宮の神主については、意見が大きく分かれている。今西龍は奈乙を nar と読み、日・太陽の義で、光明神としての赫居世を指すのではないかとし（今西 1933）、梁柱東は、「井」の古訓が ol（乙）であるから奈乙は蘿井を指すとみ（梁柱東 1957）、李丙燾もそれにしたがって、神主を赫居世としている（『国説三国史記』乙酉文化社、一九九一年）。井上秀雄は、その立場から、始祖廟祭祀から神宮祭祀への変化について、両者の差異はほとんどなく、単純な自然聖地から建造物があるものに変わっただけとみる（井上 1978）。

それに対して末松保和は、奈乙も金氏王の奈勿も、同じ nar から出た語で、nar とはほんらい民族信仰の神の名であった、と理解したうえで、神主は奈勿であろうとした（末松 1954）。また小田省吾は始祖廟が朴氏の始祖としておよび國祖として赫居世を祀るのに対して神宮は金氏の始祖すなわち闕智を祀ったものとみた（小田 1937）。

邊太燮は、こうした意見対立をふまえつつ、歴史学的な解釈を試みた。まず、哀莊王・憲德王・興徳王各代には、始祖廟と神宮をそれぞれ別に祀ったという記事があり、神宮建立後にも始祖廟がなくなったのではなく、そのまま併置されていたものとみなければならず、両者の神主と性格を同じとみることはできない、とし、赫居世説を否定する。そして『三国遺事』卷一・末鄒王竹葉軍條の分註に「今、俗に王の陵を稱して始祖堂と爲す。蓋し以うに、金氏として始めて王位に登りしが故に、後代の金氏の諸王、皆な味鄒を以て始祖と爲せり、と。宜べなるかな」とあることをふまえ、味鄒始祖説が定着し伝わっていたものとし、新羅において金氏の始祖として受け取られていたのは闕智でも奈勿王でもなく、味鄒王であったから、神宮の神主は味鄒王であった、とする（邊太燮 1964）。

それに対して崔光植は、のちに五廟制が行なわれるが、それは金氏の祖廟であり、それと神宮祭祀が並行するのはおかしい、として、神宮の神主は朴氏始祖でも金氏始祖でもなく、天地神であるとする。その根拠として、祭祀志冒頭の記述は、そのまま変遷を伝えるのではなく、始祖廟→五廟、神宮→社稷壇という変化があったととらえるべきだとし、社稷壇に変わるまでは、『礼記』王制篇において天子が祭るとされる天地を祭っていたのだとする（崔光植 1983）。吉岡完祐は、先行説をふまえて、神宮は奈乙の名称をもち、赫居世あるいは奈勿王を祭祀する祖廟で、祭天の儀礼であり即位儀礼であると理解したうえで、それが王宮南郊に位置するものとして、中国の皇帝即位儀礼としての南郊における郊祀と対比し、それを導入したものとする（吉岡 1983）。

辛鍾遠は、基本的には中国郊祀導入説を支持するが、南郊説については奈乙の問題とは別に、炤知麻立干の神宮親祀の翌年にあたる18年条の「南郊に幸して觀稼す」に注目し、それは郊祭地としてのそれであるとする（辛鍾遠 1992）。また、『三国遺事』卷1・天賜玉帶條に「凡そ郊廟大祀には皆な之（=玉帶）を服す」とあることと、同卷1・太宗春秋公條に「先に天神及び山川の靈を祀る」とあるのを対比し、大祀にあたるのは三山五岳などの山川であるから、郊廟とは天神にあたるとする。つまり、神宮とは郊廟とも称し、祭天の處を指す、とする。そして神宮始祖として、奈勿王をあげる。

こうした問題について、少し考えておきたい。まず奈乙であるが、新羅本紀では「始祖の始めて生まれし處なり」とし、祭祀志では「始祖誕降の地」としている。ここでいう始祖が、新羅の始祖で朴氏の赫居世を

指すのか、それとも金氏である炤知麻立干や智證麻立干の時代ということで、金氏の始祖を指すのか、まず考えておく必要がある。後述する五廟における「金姓の始祖」や、上記の『三国遺事』未鄒王竹葉軍条の分註にみるように、金氏の王が味鄒王を始祖としていたという後代の理解もあり、また闕智・星漢を金氏の始祖とする観念もあったはずである。「始祖」は必ずしも赫居世とはいえない。しかし、炤知麻立干2年・7年条にみえる「始祖廟」とは、前代までと同じく赫居世廟とみるべきであろうから、それに近接する「始祖」の語が異なる実体を指すとは考えにくく、また智證麻立干四年条の羣臣の上言に「我が始祖国を立てしより今に至るまで二十二世」とある「始祖」は明らかに赫居世を指す。したがって、当該の始祖はやはり赫居世と考えるべきであろう。

とすれば、赫居世の降誕の地は「蘿井の傍らの林の間」とされているから、奈乙は蘿井の近くということになり、あるいは奈乙=蘿井という理解が正しいかもしれない。あるいは、この奈乙が、発掘された、伝承地「蘿井」の意味するところであり、ほんらいの蘿井は、そのすぐ近くにあるのかもしれない。

しかし、その誕降の地奈乙に建立されたという神宮が、赫居世を祀ったものであったかどうかは、創建の地とは別に考えてもかまわない。新羅本紀では、基本的に、王の即位後まもなく始祖廟を祀っていたものが、智證王代以後、神宮を祀るように変化する。これは即位儀礼の一環としての始祖廟祭祀が神宮祭祀に変わったものと理解すべきである。以後も赫居世を祀るということであれば、それまでの始祖廟祭祀と同じということになるが、おそらくそうではない。変えたのは、始祖赫居世を祀ることをやめたということを意味しよう。神宮を赫居世降誕の地に立てたのは、始祖赫居世祭祀を廢することを意識したことではなかろうか。

では神宮の神主はどうであろうか。金氏の王として、赫居世祭祀を廢して、金氏始祖を神主とする神宮祭祀に変えたのではないかと想像するのは容易であるが、赫居世降誕の地を選んで、金氏始祖を祀る神宮を立てたという点には疑問がある。金氏始祖を祀る神宮ということであれば、金氏始祖の降誕の地雞林であるとか、金氏に関わる聖地を選ぶことができたであろうし、そのほうが自然である。金氏の王として朴氏赫居世祭祀は廢したもの、その伝統は重んじつつ、金氏始祖祭祀に移行することはできず、ほかの対象を祀る神宮祭祀に変えた、ということではなかったか。

そこで祭天であるが、崔光植説の場合、社稷壇にかわったあとも、神宮祭祀が行なわれていることをどのように理解するのであろうか。社稷壇が唐礼に則ったものであることは先にも述べたが、神宮が社稷壇に変化したという理解にはしたがえない。

また郊祀の導入について、ほんらい郊祀は都の南北郊外において天・地を祭るもので、皇帝のみに許された祭祀のはずである（金子 1982）。もしそのような郊祀を導入したとして、新羅が唐の礼制に則した礼制を採用する以前はともかく、それ以後にもはたしてそのまま維持できたかどうかは、検証する必要があろう。しかも、祀典を見た編者が、新羅の祭祀について「天地に及ばざる」ものとみていることからすれば、少なくとも、最終的な祀典における祭祀には、郊祀に類するとみなされたものはなかった、ということではなかろうか。ただし、それ以前の、炤知王・智證王代にはじまる神宮を問題にする場合、いちおう別に考えてよいかもしれない。

わたしは、古くから行なわれていた祭天を、王権祭祀として定立し、それまでの即位儀礼であった、朴氏始祖に対する始祖廟祭祀に変えたものが、神宮であるとみておきたい。その変更は、王権じたいの確立をはかるとする金氏王権の実情を背景としたきわめて政治的な意図をもったものと考える。ただし、そのごの変容の可能性を排除するものではない。その点はさらに追究すべきであろう。そして、その神宮が「蘿井」とよばれる地にあったことも、十分に可能ではないかと考える。

また『隋書』新羅伝には「毎に正月の旦に相賀し、王、宴會を設け、群官を班賚し、其の日に日月神を拜す」とあるが、この日月神と天神とがどのように関わるのかも問題である。

新羅本紀では、惠恭王代に五廟に関する記事はない。それより前にあたる神文王7年（687）4月条に「大臣を祖廟に遣わし致祭せしめて曰わく、王某稽首再拜し、謹しんで大祖大王・眞智大王・文興大王・大宗大王・文武大王の靈に言す、……」とある。ここにみえる祖廟とは、それにつづく王の言によって、「大祖大王・眞智大王・文興大王・大宗大王・文武大王」の五王の靈を祀るものであることが明かで、五廟ということができる。

上記のように、炤知麻立干代までは「始祖廟を祀る」という記事がみられたが、そのあとは神宮祭祀に変わった。その場合の始祖は赫居世であった。また文武王は、8年（668）11月に「先祖の廟に謁し」戦勝を報告しているが、この先祖とは、金氏の先祖をいうのかもしれない。ただ五廟の制として定着していたようにはみえない。それに対して、神文王代における五廟の存在は明らかである。祭祀志の記事とは異なっている。

なおここで大祖大王とは、金氏王にとっての始祖とされる味鄒王を指し、文興大王とは太宗武烈王の父龍春の追号である。神文王からみれば、考文武大王・祖太宗大王・曾祖文興大王・高祖眞智大王に、始祖の大祖大王の五王ということになる。

新羅本紀ではまた、惠恭王代より以後ではあるが、元聖王元年（785）2月条に「聖德大王・開聖大王の二廟を毀ち、始祖大王・大宗大王・文武大王及び祖興平大王・考明徳大王を以て五廟と爲す」とあり、さらに哀莊王2年（801）2月条に「始祖廟に謁す。別に大宗大王・文武大王の二廟を立て、始祖大王及び高祖明得大王・曾祖元聖大王・皇祖惠忠大王・皇考昭聖大王を以て五廟と爲す」とある。

これらの記事をもとに、米田雄介は「太祖大王（或は始祖大王）はどの王代でも五廟の筆頭神主である」「太宗・文武両大王は惠恭王代より昭聖王代までは「世々不毀之宗」で、哀莊王以降、別廟とされた」「代毎に五廟の構成は変化するが、当初、高祖父以下の直系尊属を祀るのを原則とした。しかし惠恭王代以降、「不毀之宗」と祖父と父の二神主のみを祀ることとしたが、哀莊王代以降「不毀之宗」を止めて再び高祖父以下の四神主を廟に列祀した」「直系尊属以外の者は、原則として五廟に祀られない」とみた。なお、筆頭神主が太祖大王と始祖大王と二様に呼ばれるが、それは同じではなく、太祖大王とは味鄒王でよいが、始祖大王とは奈勿王を指すという。その変化は、奈勿王一二世孫として即位した元聖王代からであると推定している（米田 1987）。

米田の推定について、昭聖王の神主を始祖大王・太宗大王・文武大王以外に、曾祖父明徳大王・祖父元聖大王を数えて、父惠忠大王を含めていないのは、よく理解できない。昭聖王の前王元聖王と次王哀莊王両代の神主はわかっており、その両方に明徳大王が含まれるため、あいだの昭聖王代にも明徳大王があったはずだということであろうか。それはいったん廃されたら復活することはあるえない、という原則があるということか（「ひとたび五廟から除かれた神主がふたたび五廟に列祀された先例はなく、また実際にもそのようなことは不可能であったのであろう」とするが、昭聖王代が先例になりうるかどうかは、ふたたび列祀するのが実際に不可能であったのかどうかに懸かっている）。

新羅の祀典について、先にふれた『東国通鑑』の記事では、宣徳王四年に「修む」としていたが、祭祀志の記事からは必ずしもそのようによめるわけではない。ただ、社稷壇が設けられたことを重視して、宣徳王代に祀典についても何らかの改編があったことは想像できる。

職官志上によれば、「典祀署。礼部に屬す。聖徳王十二年（713）、置く。監、一人。位、奈麻より大奈麻に至るまで、之を爲す。大舍、二人。眞徳王五年（651）、置く。位、舍知より奈麻に至るまで、之を爲す。史、四人」とあり、聖徳王十二年（713）春二月条に「典祀署を置く」とある。典祀署が国家の祭祀を管掌したのであろうが、それが設置された聖徳王十二年が、祀典の形成にとっても、ひとつの画期とみることができる。

その場合、その典祀署の原初形態というべき大舍の設置された眞徳王5年が、祀典形成にとって重要な意義をもっている。眞徳王代には、2年に金春秋が派遣されて唐に行き太宗に謁見して帰朝、3年に唐の衣冠

を採用し、4年には唐の年号を用い、5年には賀正の礼をはじめるなど、唐の礼制への転換がみられる。この頃から、聖徳王12年にいたるあいだが、新羅の祭祀においても唐的礼制に則ったありかたへ、変換していく時期にあたるとみることができる。

この間のこととして、『旧唐書』新羅伝には、「垂拱二年（686）、政明（=神文王）、使を遣わし來朝せしむ。因りて上表して唐礼一部並びに雜文章を請う。則天、所司に令して吉凶要礼を寫し、並せて文館詞林より其の詞の規誠に渉るものを探りて五十卷を勒成し、以て之を賜う」とある。その「吉凶要礼」が『新唐書』芸文志にみえる「吉凶礼要二十卷」にあたるかどうかは不明ながら（石井 1973）、新羅の要請に答えて唐礼を示したものとみることに問題はない。この翌年の神文王7年には、上記のように、宗廟を五廟として定めている。それは諸侯の礼にかなつたものである。

このように唐礼を受容し、それに合致する礼制をもつ祀典をつくりあげたのが、651年から713年にかけてのことと考えられる。そしてそれからすれば、宣徳王代には、それに改編が加えられたということであろう。

以上のように、唐礼の受容を考えれば、それ以前の新羅において天地祭祀が行われていたということも、あり得ると考えるべきである。わたしは、上記のように、祭天の地としての神宮を想定したが、伝承地「蘿井」はまさに神宮であり、それはほんらいの蘿井の近く「奈乙」の地に造られた、と考えるのが妥当であろう。そのことによって、「奈乙」の地であるという伝承が、蘿井というように定着していったということであろう。

4. おわりに

朝鮮三国と題しながら、百濟についてふれていない。順天市の検丹山城で十二角形建物址が検出されており、検丹山城は百濟の初築とみられているため、十二角形建物址も百濟時代のものとみることができる（崔光植 2006）。また上記の雪峰山城の八角形建物址について、百濟時代の築造であるという見方もあるが、大勢は統一新羅の築造とされる。つまり、現在のところ、確実な百濟の八角形建物址が検出されていない。

中国にも八角形建物はあった。福永光司によれば、中国古代では、上帝の祭りに八角形の壇が設けられるが、それは全宇宙空間を八角形としてとらえる宇宙論の哲学もしくは宗教哲学がすでに成立していたからであるという（福永 1982）。そしてそれは主に道教的な思想であるとするのであるが、儒教においても唐代の武則天の明堂も八角形であり（姜波 2003）、また仏塔にも八角のものがある。四角形ではない、破格の構造が外観的にも違いを意識させることになり、聖なるものであるという意識を生み出すのではなかろうか。

本稿でも、高句麗の仏塔をはじめ、それ以外の八角形建物について、始祖廟・社稷壇など壇廟としての既存の説に導かれつつ、その検討を中心に行った。そもそもそのような特殊な建物であったとみることは、すでに当然の前提になっているといってよい。

結局、高句麗の丸都山城の城内に造られた2つの八角建物は始祖廟・始祖母廟である可能性が高く、新羅山城にみえる八角建物は社稷壇とみるのが妥当であり、そして「蘿井」の八角建物は、祭天の「神宮」であるとみなしたことになる。しかし高句麗においても、新羅においても、仏寺における八角の塔が存在しているのであり、八角形建物が壇廟に限るものではないことは、当初より明らかのことである。中国において、宗廟・社稷等が必ずしも八角形でないことからすれば、一般的な四角とは異なって八角であるという、その限りで特異な構造であることが、特殊な建物に採用された背景にあると考えてもいいのではなかろうか。

なお建物として比較するのであれば、遺構を詳細に検討し、上部の構造がどうであったのかについて考える必要があるが、その点の追究はできていない。寺院の塔の場合でも、2、3層もあるのであろうという点についてはふれたが、詳細な検討は別の機会に委ねたい。

<註>

- (1) 以下の高句麗寺院の概要是、田中1995bをもとにしつつ、改変したものである。
- (2) これについて李康根「高句麗八角形建物址に対する研究」(『先史と古代』23、2005年)は、再発掘の可能性を指摘しているが、当初の調査において、八角形の玉石敷遺構の内側の方形の区画の存在を述べており、それにもとづいた解釈であろう。
- (3) 上記の清岩里寺址については、清岩里土城を王城と見た上で、その中に寺院があったととらえており、ここでのみかたと齟齬があるが、清岩里寺址は単独の寺址であり、宮殿建物の一部をなすわけではない。
- (4) ただし、千田剛道は、東台子遺跡出土あるいは採集の瓦当について、6・7世紀のものが多いとみており、遺構の年代も、それが中心的な時期ではないかとみている(千田1994)。
- (5) 以下の叙述は、田中2011をもとにしつつ、改変したものである。

<引用・参考文献> (韓国・中国の場合、日本漢字音で配列)

- 石井正敏1973「日本通交初期における渤海の情勢について」『法政史学』25号
井上秀雄1978『古代朝鮮史序説』寧楽社
今西 龍1933「新羅骨品考」『新羅史研究』近澤書店
大田幸博1993「鞠智城跡より検出された八角形建物について」『考古学ジャーナル』369号
岡田英男1993「八角円堂の平面と構造」杉山信三先生米寿記念論集刊行会編『平安京歴史研究』同刊行会
小田省吾1937「半島廟制概要」『朝鮮』269号
金子修一1982「中国—郊祀と宗廟と明堂及び封禪」『東アジアにおける日本古代史講座』9 学生社
韓仁浩1986「定陵寺に対して」『朝鮮考古研究』1986年1号
韓仁浩1990「三国時期の寺院遺跡に関する研究」『考古民俗論文集』12 科学百科事典総合出版社
桓仁満族自治県文物志編纂委員会1990『桓仁満族自治県文物志』同委員会
吉林省文物考古研究所・集安市博物館2004『丸都山城 2001~2003年集安丸都山城調査試掘報告』文物出版社
姜波2003『漢唐都城礼制建築研究』文物出版社
金日成綜合大学1976『東明王陵とその附近の高句麗遺蹟』金日成綜合大学出版社
金秉模・沈光注1988『二聖山城〈2次発掘調査中間報告書〉』漢陽大学校博物館
熊本県教育委員会2012『鞠智城跡Ⅱ —鞠智城跡第8~32次調査報告—』熊本県教育委員会
小泉顯夫1941「平壤清岩里廢寺址の調査」『昭和十三年度古蹟調査報告』
小泉顯夫1958「高句麗清岩里廢寺址の調査」『仏教藝術』33号
崔光植1983「新羅の神宮設置に対する新考察」『韓国史研究』43
崔光植2006「韓・中・日古代の祭祀制度比較研究—八角建物址を中心として—」『先史と古代』27
斎藤 忠1940「昭和十四年における朝鮮古蹟調査の概要」『考古学雑誌』30巻1号
斎藤 忠1971「飛鳥時代寺院の源流としての高句麗寺院の一型式」『日本古代遺跡の研究 論考編』吉川弘文館
沈光注2006「三国時代城郭と二聖山城」襄基同ほか2006

- 辛鍾遠1992「新羅祀典の成立と意義」『新羅初期仏教史研究』民族社
末松保和1954「新羅上古世系考」『新羅史の諸問題』東洋文庫
蘇才1961「吉林輯安高句麗建築遺址的清理」『考古』1961年1期
田中俊明1988「慶州新羅廢寺考（1）」『堺女子短期大学紀要』23号
田中俊明1995a「後期の王都」東潮・田中俊明編著『高句麗の歴史と遺跡』中央公論社。
田中俊明1995b「高句麗の寺院」東潮・田中俊明編著『高句麗の歴史と遺跡』中央公論社
田中俊明2004「高句麗の平壤遷都」『朝鮮学報』190輯
田中俊明2011「新羅の始祖廟・神宮」橋本義則編著『東アジア都城の比較研究』京都大学学術出版会
谷 豊信1989「四、五世紀の高句麗の瓦に関する若干の考察」『東洋文化研究所紀要』108号
谷 豊信1990「平壤土城里発見の古式の高句麗瓦当について」『東洋文化研究所紀要』112号
田村晃一1983「高句麗の寺院址に関する若干の考察」『佐久間先生記念中国史・陶磁論集』燎原
檀国大学校中央博物館1999『利川雪峰山城1次発掘調査報告書』檀国大出版部
檀国大学校埋蔵文化財研究所2006『安城望夷山城3次発掘調査報告書』檀国大出版部
趙詳紀ほか2008『慶州蘿井』中央文化財研究院・慶州市
千田剛道1983「清岩里廢寺と安鶴宮」『文化財論叢』同朋舎出版
千田剛道1994「瓦からみた高句麗古都集安」『青丘學術論集』5集
永島暉臣慎1981「高句麗の都城と建築」『難波宮址の研究 第七』論考篇 大阪市文化財協会
南イルリヨン1987「黃海南道鳳山郡土城里高句麗寺址に対して」『朝鮮考古研究』1987年4号
襄基同ほか2006『二聖山城 一二聖山城発掘20周年紀念特別展』漢陽大学校博物館
浜田耕策1982「新羅の神宮と百座講会と宗廟」『東アジア世界における日本古代史講座』9巻 学生社
福永光司1982「八角古墳と八稜鏡」『道教と日本文化』人文書院
藤島亥治郎1930「朝鮮建築史論」其二『建築雑誌』44輯531号
邊太燮1964「廟制の変遷を通してみた新羅社会の発展過程」『歴史教育』8輯
方起東1982「集安東台子高句麗建築遺址的性質和年代」『東北考古与歴史』1982年1期
俞偉超1973「銅山丘湾商代社祀遺迹的推定」『考古』1973年5期
吉岡完祐1983「中国郊祀の周辺国家への伝播」『朝鮮学報』108輯
米田雄介1987「三国史記に見える新羅の五廟制」『日本書紀研究』15冊 塙書房
李泳鎬1986「新羅文武王陵碑の再検討」『歴史教育論集』8
李恩碩2005「王京からみた蘿井」『慶州蘿井 神話から歴史へ』第1回中央文化財研究院学術大会 中央文化財研究院
李康根2005「高句麗八角形建物址に対する研究」『先史と古代』23
李ファソン1986「高句麗金剛寺とその伽藍構成に対して」『朝鮮考古研究』1986年4号
李ファソン1989『朝鮮建築史1』科学百科事典総合出版社
李文基2009「文献からみた蘿井」『慶州蘿井整備基本計画』慶州市
李文炯2005「慶州蘿井（史蹟第245号）発掘調査概要」『慶州蘿井 神話から歴史へ』第1回中央文化財研究院学術大会 中央文化財研究院
李陽浩2004「古代の八角形建物にみえる2種の平面形態について」『嶺南文化財研究』17
梁柱東1957『古歌研究』博文出版社

<挿図出典>

- 第1図 清岩里寺址平面図 小泉顯夫1941
- 第2図 上五里寺址八角形建物址 斎藤忠1971
- 第3図 定陵寺址平面図 金日成綜合大学1976所掲図をもとに改変
- 第4図 土城里寺址平面図 韓仁浩1990
- 第5図 丸都山城大型形建物址平面図 吉林省文物考古研究所・集安市博物館2004
- 第6図 二聖山城八角形建物址 金秉模・沈光注1988
- 第7図 雪峰山城八角形建物址 檀国大学校中央博物館1999
- 第8図 望夷山城八角形建物址 檀国大学校埋蔵文化財研究所2006
- 第9図 「蘿井」八角形建物址 趙詳紀ほか2008